

興福寺維摩会と諸宗

伊藤 隆寿

一序

会は、正に僧界昇進の登竜門となつた。

維摩会は、藤原鎌足の故事に因み、毎年十月十日より、その忌日に当る十六日までの七日間、興福寺の講堂で維摩経の講説、論義を行う法会である。『類聚三代格』卷二によれば、承和元年(八三四)正月二十九日の太政官符により、維摩会堅義得第僧は、諸寺の安居講師の資格を得ることが定められ、『続日本後紀』卷八では、承和六年十二月十五日の勅により、維摩会の講師を以て翌年正月の宮中最勝会(御斎会)の講師とすることが恒例となり、更に貞觀元年(八五九)正月八日には、凡毎年十月興福寺維摩会、屈下諸宗僧学業優長果^{三五階}二者^{上為講師}、明年正月大極殿御斎会、以^ニ此僧^ニ為^ニ講師^ニ、三月藥師寺最勝会講師^ニ、亦同請^レ之^ニ、經^ニ此三會講師^ニ者^ニ、依^レ次任^ニ僧綱^ニ(三代實錄卷二)

と定められて、三会制度が確立し、その最初に位置する維摩

会は、正に僧界昇進の登竜門となつた。

さて、この維摩会に関する第一の資料は、宮内庁書陵部所蔵の『維摩講師研学堅義次第』と京都大学所蔵の『維摩講師研学堅義次第⁽¹⁾自養和元年积文』の二つである。前者は齊衡二年(八五五)より治承四年(一一八〇)に至る三二六年分を収録するが、貞觀十一年(八六九)より同十七年までの七年分を欠く。後者は、元來は前者と一体のものであつて、巻子本三巻の下巻に相当し、養和元年(一一八一)より寛元二年(一一四四)までの六四年分を収録し欠はない。そして、この二書は、維摩会における講師・探題・研学堅義・精義等の補任の次第を中心とし、毎年の當会に関する出来事を記録したものであり、講師や研学堅義の年令・所属寺院・專攻・師承等を記載しており、平安時代より鎌倉時代までの各宗・各寺院の代表的学僧の活躍を知ることが出来る。その外、一般に公刊されている文献として『三會定一記』(大日本佛教全書所収)

があるが、上記二書に比して、講師・研學堅義の経歴の記載において全体的に簡略で、殊に、大日本佛教全書本は、誤脱が多いと指摘されている。⁽³⁾しかし齊衡二年以前と寛元二年以後のことを見る上では貴重な文献である。

そこで、今回は、初めに掲げた二書を中心に用いて、欠ける部分を『三会定一記』で補い、齊明四年(六五八)より元弘二年(一三三二)まで、最も確実に記録されている講師について、その所属寺院と宗派等より、維摩会と南都諸宗との関係を分析し、その実状を明らかにし、各寺院及び諸宗の状勢・推移を知る一助とした。

この維摩会の実際については、かつて橋本芳契博士が分析を加えられたこと⁽⁴⁾があり、わたくしも、その発表を拝聴して興味を覚え、一昨年来、その整理分析を行い、本来は、昨年の当論集に発表の予定であったが、中途作業を中断していたものである。今回、この論稿を公にするについては、分析の不備等が目につくが、全体的な改稿を要するので、従来書き上げていた部分はそのままとし、それに多少の補足をするに留めた。従つて読者諸賢の御教示を仰ぐ次第である。

二 講師の所属寺院と宗派

前項でも触れたのであるが、年令・宗派・寺院を漏らさず記録しているのは講師についてのみであり、研學堅義について

ては、必ずしもそのすべてを録しているわけではない。従つて、ここで行う寺院及び宗派を中心とする統計分析の対象としては、講師のみに限定される。しかし、研學と講師とは密接に結びついており、すでに分析の例もあるごとく⁽⁵⁾、講師の中で、研學を経た者の割合は記録された全講師の六〇%を越えている。そのことから、本来的には、研學と講師とを合せて考察の対象とすれば、統計的にも、より確実な実状に近いものとなることが予想されるが、今の場合研學を除いたとしても、その分析の確実性は、さほど相違したものではない、と見てよいかと思う。

以下、所属の寺院・宗派毎の統計によつて順次述べて行きたい。(表一・二参照)

イ 所属寺院

講師の所属寺院については、すでに橋本博士によつて、時代毎の集計がなされている。ただ、博士の集計は、齊明四年から治承四年(一一八〇、上記二書の前者に相当)に至る実数三六年分についてであるが、今は、養和元年から寛元二年に至る京大所蔵本の六四年分と、さらに『三会定一記』により、寛元三年から元弘二年(一三三二)までの八八年分を加え、奈良時代より鎌倉時代までに拡大するので、記載の実数は五一六年、五一六人の講師を対象とする。それによつて、平安後期以後の維摩会の実状が明瞭となるからである。

さて、維摩会講師の所属寺院として掲げられているのは、興福寺・東大寺・元興寺・藥師寺・延暦寺・大安寺・西大寺・法隆寺の八ヶ寺である。つまり南都七大寺に延暦寺が加つて、それらの寺院に所属する各宗の学僧が維摩会の講師となつているということであるが、逆に、右以外の寺院を本寺としている僧侶は講師となることは出来なかつた、ということである。右の中では、講師の数において最も多のが興福寺であること論を俟たない。全体の五一六人中、三三五人、六五%が興福寺僧で占められ、第二の東大寺は九二人で歴然たる相違となつてゐる。ただし、この数字は、奈良から鎌倉末までの総体的な割合であるが、維摩会が恒例となり、三会制度が確立されて間もなくの頃、つまり平安初期⁽⁶⁾には、全講師に占める興福寺僧は三一%であり、これは、一連の、朝廷の仏教政策、すなわち、南都諸宗諸寺の融和と、その円満なる研鑽発達をうながす、という趣旨が、良く反映されて、各寺の優秀なる学僧が、公平に選ばれていたことを示すであろう。しかし平安中期になると六二%となり、後期には興福寺と東大寺に限定されてしまい、興福寺僧は八一%となつてゐる。この興福寺僧優位の状況は、藤原一門の氏寺であること、鎌足の故事に因む法会ということから生じたのであるが、もう少し具体的に述べるならば、講師となる条件として、研学堅義者となり得第しなければならず、さらに、それに先んじ

て、維摩会の聴衆となることが必要であった。そしてこの聴衆は宣旨聴衆の意味であり、講師・研学と同様前もって任せられることが定められ、その決定に当つては、僧綱が候補者を選定し、最終決定権は、藤原氏の長者が握つていた、という事情が一つの背景となつてゐる。また、平安後期には、興福・東大の二寺のみとなつてゐる理由としては、院政期に入つて、新たに三講の制度が設けられ、東大・興福・延暦・園城の四大寺の僧を以て講師等に任することとなり、三講を経た者が、三会の講師となる資格を得る要素となつたことや、同時期に、北京三会あるいは天台三会と称される、法勝寺大乗会、円宗寺法華会、同最勝会が、南都の三会に代わる僧綱昇進への道となつたことが考えられる。前者によつて、南都においては、興福・東大両寺以外の学僧が講師となることは事実上閉ざされたと言つて良く、後者の場合は、延暦寺僧が維摩会から姿を消すこととなつた第一の理由である。その外、南都教学の衰退ということもあつた。この点は後に触れることにするが、以上の諸状況が、講師の所属寺院の推移の上に現われていると考えられよう。

口 各寺の教學系統

次に、各寺では、いかなる教學系統が伝承され、どのように推移したかについて考察したいと思う。

南都の教學系統は、一般に、南都六宗と称されているが、

それ以前は、天平年間に、すでに修多羅衆⁽¹⁰⁾・三論衆・律衆・摂論衆・成実衆等の研究グループが大安寺・元興寺・法隆寺に存在したことは周知のことである。そして「宗」の呼称が用いられ定着したのは、東大寺造立の頃であつたとされる。しかし、平安時代に入ると、南都佛教界の様相はかなり変化して、僧侶の学問系統も、諸經論を広く学ぶ、ということがではなくて、専門化して行く傾向となつた。つまり特定の教学系統、従つて特定の經論がより多く學習されることとなる。その事情は、先に述べた朝廷の仏教政策の勅にも示されており、特に法相宗が南都を風靡し、かつて南都佛教界の指導的立場にあつた三論宗の形勢が衰えたために両宗相争う状態となつたことは、よく言及されるところである。そして維摩会等の法会には、六宗の僧侶を請い、学業を広くすべし、との勅にもかかわらず、時代が降るに従い、法相宗一邊倒的な傾向は増え拡大されたと考えられる。そのことが、維摩会講師の所属宗派にも顯われて來るのである。後に掲げてある表一によつて知られるであろう。

今、多少の補足をするならば、興福寺は、勿論法相宗のみであるが、中に三名、真言宗を兼ねている者がある。しかし、それは平安中期に限られる。東大寺は、三論・華嚴・法相の三宗であるが、三論宗の中に、真言を兼ねた者が二名と法相宗で真言を兼ねた者一名ある。元興寺は、法相・三論が

主で、兼学として真言と律が各一名ある。藥師寺は、法相・三論・華嚴の三宗、大安・西大・法隆の三寺は共に法相と三論の二宗で、延暦寺は当然ながら天台宗のみである。このよう、各寺において、一応、天平期以来の諸宗兼学の学風は維持されていたと考えられるものの、各宗の年分度者が定められ、それぞれ本業の宗派に、ある程度制約される状況であるから、実際に右以外のいかなる教学系統が各寺に存在し研究がなされていたかは、講師の所属宗派のみでは知られない。つまり各人の学問の内容が、どの範囲のものであつたかは他に依らなければならぬということである。しかし、各寺で中心となつていていた教学系統は何か、ということは、ほぼ知り得るであろう。

ハ 教学系統の推移

以上に関連して、さらに宗派を視点として考察を加えるならば、右に示したごとく、南都における中心の公的宗派は、法相・三論・華嚴の三宗で、それに律・真言の二宗の名がわずかに見られる。しかし、これが必ずしも南都佛教界の実状を示すものではない。真言宗は、当初はともかく、序々に南都に浸透していることが、兼学者の明示によつて示されており、改めて指摘するまでもあるまい。そして次第に南都佛教から独立した形で、東寺や高野山を中心に教線を拡大し、南都の大会という場には顔を出さぬというに過ぎない。この点

は、後に更に触れたい。そして、律宗にしても、唐招提寺や東大寺戒壇院等において、その学統は連綿と維持されており、また律は、必須の科目であり遵守すべき事項でもあった。従つて右の真言・律の二宗を本業としていた者が講師となつた例が少ない、ということのみである。天台宗は、最澄の力により、南都佛教界と正面から対決し、それを御するという形で、堂々と大会に参加していたことは、真言宗のあり方とは対照的に、実に良く両者の性格、教線拡大の方法が顕われていると思われる。後に述べるごとく、三論宗は、法相宗に次ぐ実勢を有していたごとくではあるが、平安中期以後は、三論のみを専ら修学するということではなく、特に密教（真言）を兼学したり、浄土信仰を持つということにおいて、その命脈を保っていた。そこで、今しばらく、法相と華嚴の両宗について、その推移を窺つておきたい。

法相宗は、言うまでもなく興福寺が本拠であり、始終一貫した研究の伝統を維持している。興福寺以外の法相宗について見るならば、統計上、興福寺に次いで数の多いのが元興寺であり、以下薬師寺、東大寺、大安寺、西大寺、法隆寺となる。元興寺の法相宗は、平安初期に最も盛んであり、三論宗をしおぎ第一の勢力を持つていたと推察される。道昭（六二九一七〇〇）や智通・智達の伝來した唯識学の伝統が充分に發揮されていたことを物語り、護命（七五〇一八三四）・仲繼・泰

縁・明詮等の代表的学者を輩出したことは諸書に詳しい。しかし、平安中期になると、興福寺勢力の増大と共に元興寺は衰退し、講師に任せられた人も、二名のみとなる。そして、元興寺法相宗として最後の講師となつたのは、天暦四年（九四二）の泰幽であり、それ以後止絶えた。このような傾向は、他の諸寺においても同様であり、法相宗は、北寺伝の興福寺に集約されて行く様子が、講師の数の上にも、はつきり現わされている。薬師寺で最後の講師となつたのは、天仁元年（一〇八）の隆信で、その前は天喜四年（一〇五六）の道静であるが、その間四十二年。東大寺では、寛徳元年（一〇四四）の長範が最後であり、大安寺では寛仁元年（一〇一七）の胤香が最後で、その前は彼の師である仁覚が、天元三年（九八〇）に講師となり、その間三十七年、さらに仁覚は大安寺として五十八年ぶりで宣旨が降つたものであった。また西大寺では、貞元元年（九七六）の淨珍が最後となり、彼も五十九年ぶりのことであった。このような状況から判断すると、平安中期以後は、これら寺院の法相宗徒は、まず講師となること希有に属していたことになる。あるいは、興福寺以外での法相研究は、細々と継続されていたに過ぎず、講師となるべき人材もなかつた、ということであろう。

次に華嚴宗について見ると、講師は東大寺と薬師寺から出ている。薬師寺の講師は、平安初期に明哲・長朗・義聖の三

表一 維摩会講師の内訳

寺・宗名	奈良	平安初	平安中	平安後	鎌倉	計
興福寺	一	三三	九七	七九	一二五	三三五
元興寺	一一二	一三	一二	一三	一三	(三)
薬師寺	一	兼法(二)	九	三二	一	一七
東大寺	一	八	四四	一	一	一
西大寺	兼三(二)	五一二	一九	一	一	一
大安寺	三	六八	一四四	一	一	一
延暦寺	四	二五	一五	一五七	三四	一四
法隆寺	五	四	二二	二八	二八	五二
不明	七	一一二	一二	一一	一一	一一
計	一〇七	一五六	九八	一四八	五一六	一

人である。この三名は、薬師寺系の華嚴と称される人々であり、明哲は審祥に華嚴を学んだ慈訓（一七七七）の弟子であり、長朗は、同じく慈訓の弟子正義を継ぐ人で、義聖はその弟子である。従つて師資関係にある三人が講師となつた後は止絶している。一方、東大寺の華嚴宗は、その中心たる教学系統として伝承され、今日に至つては、平安初期に十一名の講師を出し、東大寺第一の教學系統として、その勢力を維持していたことが推察される。しかし維摩会に限つて言えば、平安中期からは、三論宗が講師の数においてしのぐこととなり、それは鎌倉末期まで変わらない。この点については、それなりの理由が考えられねばならないが、次項で触れることにする。

以上により、各宗の状勢がある程度推察されると思われ、維摩会が興福・東大の二寺に集約されたことは、宗派の上では法相・三論・華嚴の三宗に集約されたということになる。平安後期からは、天台・真言二宗が消えたことも、維摩会の質的変容を物語つっているであろうし、南都古宗の推移と新興二宗の関係対応が、象徴的に顯われているとも言えよう。さらに興福寺が独占的に行うに至ることも推測される。その中にあつて東大寺の三論と華嚴の僧が時折講師に任せられる状態であった。

表二 宗別の統計

宗名	奈良	平安初	平安中	平安後	鎌倉	計
法相宗	五 (六・七%)	六九 (六九・六%)	一一二 (八一・六%)	八〇 (八四・五%)	一二五 (七四・四%)	三九〇
三論宗	二 (八・二%)	一一〇 (六・二%)	一二六 (一四・三%)	一四 (一一・三%)	一七 (一五・二%)	八〇
華嚴宗	一四 (三・七%)	八 (五・〇%)	四 (四・一%)	五 (三・四%)	三一 (五・九%)	三一
天台宗	四 (三・六%)	一〇 (六・二%)			一四 (二・七%)	一四
真言宗	一〇 (一・六%)	五 (三・一%)			七 (一・三%)	七
律宗	一 (一・九%)				二 (一・〇%)	二
不明					一 (一・〇%)	一

出して各時代の特色に言及し、最後に、三論宗の位置について述べておきたい。

齐明天皇四年(六五八)に鎌足の請によつて山科の陶原の家において、元興寺三論宗の呉僧福亮が維摩經を講じたことが、当会の最初であるとは、諸記録の一一致して伝えるところである。その後中絶していたが、慶雲三年(七〇六)に藤原不比等が、入唐学生智宝(元興寺法相宗の智鳳)を請して、鎌足の忌日を以て維摩会を実施し、同四年には厩坂寺で新羅僧で三論宗の観智を講師とした。¹²⁾ そして和銅七年(七一四)に始めて興福寺で実施された。恒例となつたのは延暦二十年(八〇二)からである。従つて奈良時代は、その講師も明らかのは七名であり、しかも未だ国家的行事でもなく、まして僧綱への道でもなかつた。ただ、鎌足と『維摩經』信仰が因縁となり、最初の講師が三論宗の学僧であつたということは、後の維摩会における法相宗と三論宗の位置、換言すれば、興福寺と東大寺の関係を、すでに示唆していくと言えるかも知れない。

三 総論会と三論宗

1 各時代の梗概

以上述べたことにより、維摩会講師の所属寺院及び宗派の構成と推移について、ほぼ判明したと思われる。従つて、ここで繰返し云々する要もないが、右に触れなかつた事柄を抽

と、講師となることは、自己の研鑽の成果を示し、仏教界における自己の立場を確立する場となり機会ともなつたであろうことは容易に推察されよう。その点は、先にも触れたのであるが、講師の勅任と共に、維摩經義を中心に出題される問題に対して、義を立てて答える研学堅義が設定されるに至り、この維摩会は、僧界への登竜門としての役割と同時に、南都仏教学の振興に対しても、大きな意義を有するものであったと考えられる。先の承和元年の太政官符により、研学堅義の得第僧は、諸寺の安居講師の資格が与えられることが定められた。従って研学の設置は、それ以前から行なわれていたと思われるが、記録が残っている最初は、貞觀五年（八六三）の講師となつた元興寺法相宗の賢応が、承和八年（八四一）に堅義者であったといふことであり、正式に制定されたのは仁和二年（八八六）である。その研学堅義となり、それに及第することが、講師となる資格を得る第一の条件となるに及び、一層仏教学の研究を推進させることになつたと推察される。勿論、南都教学の興隆は、当会のみに依るものではないが、当会と並ぶ御斎会、最勝会を加えた南都の三大会を始めとして宮中や諸寺で実施された諸種の法会は、經の講義と論義を伴うものであり、各宗教義の研究とその深化及び立場の明確化ということに対し、大きく作用したであろうし、それが各人の専門化及び諸宗の集約化にも影響を及ぼさなかつ

たであらうか。後代になつて、論義は多分に形式化し、法会そのものも単なる儀式あるいは資格を得るためという形骸化は予想されるにしても、鎌倉時代に至つて成立する我国独自の仏教を成立させる基礎的作業を推進する一翼を担つたに相違なかろう。公的な年中行事の中では、講説・論義を伴う主要なるものは、右の三会であるが、五月に宮中の清涼殿で五日間修行された「最勝講」も重要な行事であり、それを含む三講も、三会と同様の意義を有するものであつた。また春秋三月に良辨が東大寺縉索堂において始めて修したとされ、後三月に良辨が東大寺縉索堂において始めて修したとされ、後三月に良辨が東大寺縉索堂において始めて修したとされ、後三月に良辨が東大寺縉索堂において始めて修したとされ、後三月に良辨が東大寺縉索堂において始めて修したとされ、「法華八講」の名で修された、法華經八卷を八座に分けて講読する事は、三論宗の勤操が、石淵寺で創設したものである。以上のような公的な法会の外に、各寺を中心にして、近隣の関係寺院の学僧が会衆となつて行なわれた法会も多くあつた。一例として東大寺の場合を見ると、二月二十日から四日間修された「八幡宮御八講（春季談義）」があり、その会には東大寺僧を始めとして諸宗の学徒七十人と所司等が参会した。三月には、十四日の華嚴会、十六日の法華会があり、四月十五日に夏講、八月には春と同じく八幡宮御八講（秋季談義）があり、十一月に三十講が修され、十二月には「方広会」があつて、やはり諸宗の学徒が参加した。そしてこの会は、

堅義があつて、これは学徒が始めて修すべきものであつたとされる。これらは東大寺全体の行事として、諸宗の学僧が共に修行したものであつたが、この他に、各宗毎の行事もあつた。

たとえば、華嚴宗のみで行なう「華嚴講」や、三論宗のみで行なう「大乘義章三十講」⁽¹⁸⁾等である。このようにして見ると、宮中での法会や各寺の法会、さらに各宗毎の法会と、年間を通じて、なにがしかの法会が毎月一度、三月は四種の法会が行なわれるといった状況であり、学僧にとっては、大変な慌しさであったことが伺われよう。そのすべてに参加するということではないにしても、いずれ自己の研鑽の場であつたと思われる。したがつて、そのような法会の場に臨み聴衆となり、さらに問者となり堅義者となるには、日頃の研究精進は欠かすことが出来ない。まして講師となるには、それ相応の実力を要したであろう。

このような気運に醸成されて著わされた書も恐らく多く存するであろうし、また将来に備えて、諸種の文献を筆写するということも大切な仕事であつたはずである。たとえば、永観二年（九八四）の維摩会で研學堅義を勤めた興福寺法相宗の清範（九六二—一九九九）は、その時、七卷章の第一巻を立てたとされる。これは、慈恩大師の『法苑義林章』（七巻）の第一巻に含まれる問題をテーマとして堅義したことであるが、その準備として著わされたのが、彼の『五心義略記』である。

ある。その奥書には、明らかに、

永觀二年六月十三日大略抄之、是則為允當年研学立義也、興福寺
釈清範春秋廿二（大正七一、二九七下）

と述べている。講師・研学等は、大体前年の維摩会の際か、その年の春には宣旨が降るから、清範は宣旨を受諾して、六月の時点で、その準備の書を著わしていたことになる。また、三論宗の珍海（一〇九二—一五二）の『八識義章研習抄』三巻（大正七〇所収）は、保安元年（一一〇〇）十二月から翌正月にかけて添削整理されて成ったものであるが、その巻上の奥書によると、「去年の御堂の堅義のために抄するところなり」と述べ、巻中には「元永二年（一一一九）月日、記せんがために之を録す」としている。御堂というのが東大寺か醍醐寺のそれがあるいは維摩会か不明であるが、ともかく珍海は元永二年の法会で堅義者となり、その時『大乗義章』の「八識義」をテーマとしたことが知られる。そのことは、また彼の『三論玄疏文義要』巻五の八識義を述べるところにも言及している。すなわち、

予勤乎勸學堅義日、立淨影八識義、得七法不住題、題者興福寺永
緣權僧正、頻責取捨、予答云、修多羅含五義、謂顯示義、涌泉義、
出生義、繩墨義、及結髮義也、若爾、一文之中具含多義、淨影意
契顯示義、金陵釈當繩墨義破邪頭正、云繩墨義、凡於一文出衆義、猶如涌泉、
何必執相破、言遂捨異釈云（大正七〇、二七四上）

と回顧している。この文からすると、勸学堅義という呼称と、興福寺永縁が探題であったことからすると、東大寺八幡宮御八講か維摩会であつたようと思われる。しかし『三会定一記』第一に依ると、珍海は、永久三年（一一一五）に東大寺分の堅義者となつていて、確定は出来ない。とにかく珍海は、清範と同様、堅義のために八識義についての論文を準備し、堅義を勤めて後、旧稿に手を入れて現存の形としたことが明らかである。このような例は、恐らく他にも多くあつたことが推察され、現に東大寺図書館に存在する多くの写本の中にも、法会のために著わされ筆写され、筆録された「論義書」や「問答抄」「聴聞抄」の類が多数を占めるることは、それを証するものであろう。

さて、維摩会の実際のことに戻ると、平安時代の初中期が名実共に最も隆盛を極め、諸宗の学僧が競つて維摩会に参加する状況であつた。と同時に、内部的には多少の変化も見られるようになる。その一として、講師の年令が時代と共に若年化するという傾向と、二には研学堅義者や聴衆等の数が増加されるということである。第一点は、平安初期の講師の平均年令は、六七・七歳であるが、中期には六一・六歳から五十歳台に、そして後期には四八・九歳というように下がつて来る。このことは、僧綱の定数の増加とも相応することごくあり、三会が僧綱への登竜門という性格が定着するにつれ、

各寺各宗の政治的動きも活発化し、講師任用が早まると共に、僧綱の任用も増加するという現象となつて現われている。それが、鎌倉時代となると一層顕著となり、平均年令は三十歳台となり、極端な場合は、十九、二十歳で講師となる例も見られ、そのような特殊な血縁・権門勢家による任命にからんだトラブルも発生するようになる。⁽¹⁹⁾これは、最早、維摩会が仏教界の公的な、本来の趣旨に添つた行事というよりは、むしろ興福寺と東大寺との私的な、特殊な法会といふことに変質して行つたことを示している。そのことはさらには、僧綱への登竜門という性格も次第に薄れて行くということもあつた。つまり権威の失墜である。つまり、平安中期までは、講師の時に、すでに僧綱に補任されていた者は非常に少なかつたが、後期から鎌倉時代になると急激に僧綱補任者が増加するというところに表われている。⁽²⁰⁾第二点は、正式に研学が定められた仁和二年から寛和元年（九八五）までは一人に限られていたが、寛和二年に准研学が置かれ、永祚元年（九八九）からは二人が研学として宣旨が降ることとなる。また『三会定一記』によれば、長保元年（九九九）頃より正規の研学の他に、東大寺・薬師寺等から各一人の堅義者を出すこととなり、さらに時代が下ると各寺から一人乃至三人の堅義者が立つこととなつた。このような数の増加は、同席聽講し、研学堅義の候補である聴衆についても見られ、本来宣旨

聴衆は三十人と定まっていたが、貞觀十八年(八八六)に九人増加されて堅義者一人を含めて四十名とされ、以後恒例となつている。

以上のような内的な推移は、各寺各宗の要請に基づき、公平化を計るという方策でもあつたと思われるが、それと裏腹に、藤原一門の隆盛に応じて興福寺中心の運営が強められ、平安後期には事実上興福寺のみの法会という様相となつたことは、表向きは律令制の導入による公平なる任用というあり方を採用しながら、結局は、特殊な血縁関係や出身の良否によって動かされるという、日本的なあり方となつたことが明瞭に示されているであろう。

口 三論宗の位置

先にも述べたごとく、最初の講師として福亮が勤めたことは、その頃の南都仏教の主流が三論宗であったことを反映しているが、それが、維摩会と三論宗との関係を浅からぬものとした、と見ることも可能であろう。先に示した宗別の統計(表二)によると、数の上では絶対的に法相宗が多数を占めるものの、三論宗は各時代共平均して講師の任命があつたことが知られる。華嚴宗が、平安初期を最高に以下極端に減少して行くのは異なつていて、これは、法相宗の優位はゆるが、ものではあるが、平安初期から鎌倉時代に至るまで、三論宗の学統は失なわれることなく、一応その面目を保持してい

た、と見なくてはならない。内的な変容は、また別の問題として、表向きの三論宗の形勢は、従来一般に、法相宗の隆盛と共に衰退し、そのまま消滅して行つた、と言うような見方は、少しく修正の必要があらう。このことは、法相宗の教学の振興についても、平安時代に入つて暗黒時代とか衰頗時代とか呼ばれていたことが、見直されていることと相応する。

大勢として、先の表一に示したごとく、元興・薬師・大安・西大・法隆等の各寺で盛んに研究されていた三論学が、平安中期以後絶えてしまつたことは否定出来ない。しかし、それは一人三論宗のみではなく、法相宗もやはりそれらの寺々ではその学統を維持することは困難であった。その点は、教学系統の推移のところで指摘したごとくである。今、三論宗の場合を示すならば、元興寺の三論宗は応和元年(九六一)の安進が最後の講師であり、薬師寺は正暦五年(九九四)の平超、大安寺は寛平九年(八九七)の寿令、西大寺は貞觀七年(八六五)の平恩、法隆寺は齊衡元年(八五四)の道詮が各々最後である。つまり興福寺と東大寺に集約されたことは、南都諸宗も、この二寺に集約されたことを意味する。そして興福寺に対抗し得る存在は、諸種の方面において東大寺となつた。その東大寺の中心は何か、と言えば、各宗兼学・諸宗の振興を基本とするも、華嚴宗を第一の教學系統とする。従つて一般に、華嚴宗が各時代を通じて中心に位置し、東大寺の勢力を

掌握していたと見られがちであるが、実情は、先に触れたごとく、平安初期はその通りの状況ながら、必らずしも安定したものではなかつた。

再び講師数を持出すと、平安中期になると、東大寺三論宗が十九人に対し、華厳宗は八人と半数以下となり、その状勢は以後も変らない。これは、明らかに、東大寺華厳宗の不振を物語ると共に、三論宗の抬頭があつたと考えられよう。このことを、つまり東大寺における三論宗の位置、ひいては南都における位置を別の観点から窺つておこう。

一つは、東大寺の一山を総括統御した最高の僧職である別当の補任の次第である。『東大寺別当次第』には諸本あるが、今は大日本佛教全書本に依る。この書は、天平勝宝四年（七五二）の第一代別当良辨より第一六七代寛宝（安永三年、一七七四まで）に至る一〇二三年間の記録であるが、上述の維摩会の分析範囲と同じく、鎌倉時代末まで、すなわち第一一二〇代の教寛（元弘元年任）、再任があるので、人員にして一〇六名を対象とし、別当の所属宗派等を調査すると次のとくである。

- | | |
|-------------------------|--|
| 一、奈良時代 第一代—第九代華厳宗のみ。 | |
| 二、平安初期（第一〇一—第四二、三三代三十人） | |
| 華厳宗 一八人 三論宗 一人 | |
| 真言宗 六人 法相宗 三人 | |

三、平安中期（第四三—第七一、二九代二五人）
　　律宗 二人
　　華嚴宗 三人 三論宗 一〇人

四、平安後期（第七二—第八四、一三代一二人）
　　華厳宗 ○人 三論宗 四人
　　真言宗 八人

五、鎌倉時代（第八五一—第一二〇、三六代三〇人）

華嚴宗 三人 三論宗 一五人	
真言宗 一二人	

以上の結果からも、先の維摩会講師の分析結果と同様の状態が示されて来る。平安中期から三論と真言の抬頭があつたことが歴然としている。真言宗の東大寺への進出は、弘仁元年に空海が別当（第一四代）に就任したことに依るが、三論宗の進出に拍車をかけたのは、何と言つても貞觀十七年（八七五）の聖宝による東南院の開創である。

聖宝（八三二—九〇九）は、承和十四年（八四七）十六歳で貞觀寺の真雅僧正（空海の舎弟）に随つて出家得度し、それ以来東大寺に止住して仏教学を学んだ。元興寺の願曉と円宗から三論学を、東大寺の平仁と玄榮から各々法相と華厳を学んだ。そして貞觀十一年（八六九）三十八歳の時に、円宗が維摩会の講師となり、彼は研學堅義を勤め、三論宗賢聖義と二空

比量を立てたとされる。この頃には、三論学者としての頭角を顯わしていた。他方、真雅からの密教の受法も行い、南都諸宗の教學を究め、また寛平二年（八九〇）五十九歳の時、貞觀寺座主になると同時に七大寺檢校に任せられたから、南都佛教界の趨勢といふことも見極めていたのであろう。それが、東南院の開創となり翌貞觀十八年の醍醐寺の創建になつたと考えられる。

東南院の開創の目的、詳細な事情は記録上定かでないが⁽²¹⁾、恐らく法相宗の隆盛に対し、三論の復興を意図したものではなかつたか、と思われる。東大寺には、すでに空海による灌頂道場としての真言院（南院）があり、二十一人の定額僧があつた。したがつて南都における密教の位置は、一応確保されており、あえて更に密教の道場を置くことはないであらう。彼は顯密一致の理想を実現すべく、顯教は三論と定めて、東大寺にその本拠を設け、一方醍醐寺の開創によつて密教の拡大を計つたと見られる。その際、一つの大きな質的変容が伴つたことは否定出来ない。それは密教の兼學である。この点は、淵源をたどれば、「求聞持法」の伝承からすれば、道慈に認められることになり、勤操—空海と次第することになるが、その史実はともかく、三論と真言との接近は、かなり早くから見られ、それらの伝承の成立は、三論と真言の兼學が盛んとなつた実状を反映したものとも理解される。そし

て、聖宝においては、すでに、その自覚・認識が深められ、一体化した形で具体化されていたことは、彼の経歴が物語つてゐる。三論・真言の親近性、兼学の歴史、その思想的背景については、諸方面からの検討を要し、また日本佛教史上、一の重要な問題であると思われるが、聖宝の創建にかかる東南院は、その出発の時点から密教兼学の三論宗という性格すべきがなされたことは、大きな歴史的意義を担つたと言えよう。聖宝の意図を象徴的に表わすものとして、彼の愛用した「如意」の存在がある。種々の伝承によれば、彼が七大寺の總檢校になつた際、顯密兼学の旨を表示せんがために作ったとされ、「五獅子の如意」と称した。それは、如意の表（頭の部分）に白銀で彫刻した五つの獅子を付し、それを以て顯宗のシンボルとし、裏に三鉢を三つ付して密宗のシンボルにしたとされる⁽²³⁾。そして代々東南院に襲藏されることとなり、現在東大寺に所蔵されている⁽²⁴⁾。しかも、この如意は維摩会においても欠かせぬ法具となつた。それは、聖宝の資である延懶（八六一—九二九）が、延喜十一年（九一一）に講師となつた時、この如意を持つて勤仕して以来、維摩会の講師は、必ずこの如意を持つて提撕することとなつたからである。その後、この如意をめぐる興福・東大寺なむち法相・三論の主導権争いも演じられることになるが⁽²⁵⁾、聖宝の顯密兼学の学風を継承し、それを佛教界に顯示し定着させた延懶の功績も見逃すこと

とは出来ない。延懶が、東南院として始めて東大寺別当（第四十代）になって以来、二十九名の三論宗所属の別当が輩出するが、その中で真言宗の兼学者は二十一名に及ぶ。聖宝の意図は、彼の体験に裏づけられた信念により、真言との兼学において三論の存続を考え、逆に、三論との兼学によって南都における密教の拡大浸透を一段と飛躍させたとも推察される。学解仏教的性格の強い三論学が、密教の事相・觀法の導入・融合によつて、生命を吹き込まれたということになる。三論の無所得・無住・八不中道等の思想が、觀法の場で一つになる可能性は充分考えられる。

聖宝は、醍醐天皇の信任を得て、延喜五年（九〇五）に至つて、大安寺の佐伯院を東南院に移建して拡大充実させ、後三条天皇（一〇六八—一〇七二）の時に、院主は、三論宗の長者を充てることとなり、これに依つて、東南院は三論宗の本拠たる地位を与えられた。⁽²⁷⁾ 大安寺の三論宗は佐伯院の移建によつて廃絶する結果になつたであろうし、大安寺そのものも、延喜十一年（九一二）の講堂の焼失や寛仁元年（一〇一七）の諸堂の焼亡によつて学統を断絶させた。また元興寺は、伽藍の存続はあるにしても破損著しく、先にも述べたごとく維摩会講師は応和元年（九六一）以後止絶え、さらに西大寺も承和十三年（八四六）に講堂を焼失し、⁽²⁸⁾ 貞觀七年（八六五）以後講師は出なかつた。かくの如き状況から、法相宗は法隆寺と薬師

寺でその命脈を保ちつつも、實際上は興福寺が本拠として栄え、三論宗は東大寺東南院に集約されたのである。

さて、以上が東南院の開創に関連する概略であるが、その設置によつて、東大寺における三論の地位は急激に高まつたのである。そして華嚴の學問道場である尊勝院と共に、その権勢を振つたが、先に示した別当の状勢から判断すると、平安中期以後尊勝院をしのぐ存在であつたこと明白である。従つて、東大寺の實質的な総括権は長期にわたり、かなりの部分が東南院に委ねられていたと考えられる。現存する厖大な東南院文書は、それを如実に物語つてゐると言えよう。このような東大寺における三論宗の地位は、興福寺に対し得る唯一の存在となつたと考えられる。それが、平安中期以後の維摩会における立場として現われたと見ることが出来よう。

東南院の三論宗は、真言の鎧を纏つた姿となり、良家の子弟の入寺ということも有力にはたらいたと思われるが、南都第一の伝統教学として、その面目を保持し続けたのである。

四 結

興福寺維摩会の講師を中心にして、維摩会をめぐる南都仏教界の状勢・推移の一端を考察した。当初、この維摩会を取り上げようとした動機は、南都において平安時代を中心にお役割を果した法会の具体的な姿を通して、当時の南都各

寺・各宗の様子、学僧の動き、その背景にある政治状況等、より現実的な、鮮明なるイメージを得ることは出来ないだろうか、という素朴な願望からであった。結果は如上のごとく、掛け離れたものとなつたが、その理由の第一は、分析の不充分さと、その裏付け、論証の不備である。この点は、大いに反省しているのであるが、その外、講師や研學堅義の補任ということの、裏に潜む人々の動き、確執の事実を述べる余裕がなかつたことにも依る。維摩会をめぐる東大寺と興福寺の関係交渉については、多くの事柄が記録され、それは、教学上の論争を超えて、実にリアルな、感情、利害の衝突を内容とする。そのような事は、何も維摩会に限つたことではなかつたと思われるが、その具体例については触れ得なかつた。また、維摩会やその他の法会における講説や堅義・論義の内容も、維摩会等の実際を語る重要な側面であるが、これも省略した。さらに、三論宗については、最後に少し触れたのであるが、なお人脈、活動、諸宗との対応、論争等より、総体的な研究を要すると考えている。

従来、南都仏教は、日本佛教の全体的な流れの中で位置づけがなされ、総体的な推移として把握され説明づけられることが多い。それは、南都諸宗の興隆と、それに対する天台・真言両宗の抬頭による衰微、そして鎌倉初期の復興あるいは復古という図式である。しかし、そのような捉え方では、平

安時代の南都仏教を正しく評価し位置づけることは困難であろう。鎌倉仏教成立に果した平安仏教の意義は、未だ充分に究明されているとは言えない。特に南都の伝統教学である三論宗の研究は、全くと言って良いであろう。先に指摘した聖宝に依る密教兼学の傾向は、三論教学にいかなる影響を与えたのか。日本の三論学と中国の三論学は同じなのか異なるのか。異なるとすれば、どのように相違したものとなつたか。この点を解明するのに、三論と真言との融合、三論と浄土教との一体化は、重要な問題となろう。これらは、すべて今後の課題としたい。（昭和五十四年七月稿）

〔註〕

(1) 前者は、宮内庁書陵部により、昭和四十八年七月に、巻子本の複製が発行され、その「解題」に附録として、京大本の翻刻がなされている。

(2) 各々の役割は、講師は言うまでもなく維摩経を講説する人で、三会を遂講すると已講と称し、講師に補された人を擬講といふ。探題は、經義を中心に論題を選定して出題する役で、普通は已講以上の者が勅任される。研學堅義は、探題の出題に対しても義を立てて答える役である。また精義は証義とも記され、論義の可否を評価する役である。出題は、必ずしも維摩經義に限られたものではなかつたようで、研學堅義は、前もつて堅義のテーマを決めて準備し、その堅義について質問応答がなされた。さらに出題もされたようである。従つて、堅者の外に問者もあつた。後代の形式化した時代のことと思われるが、問答は十則で、半分は華嚴

から、他は因明論から選定する例であつたとされる。研学堅義者は、その内五題以上を説答すれば合格となり、遂業つまり得業となり、講師への資格を得ることになる。なお堀一郎『上代日本仏教文化史』(上)一九七頁参照。

(3) 前註(1)の「解題」一一頁参照。

(4) 昭和四十九年七月二十七日東洋大学における印度学仏教学会で「維摩会の規模と実際—その思想史の一考察—」と題して発表その際、宮内庁書陵部蔵の先掲資料に関する統計表三枚をプリント配布された。それは、第一講師の所属する寺院、第二講師の年令並びに人数、第三研学を経験して講師に進んだ者が講師全体において占める率の三つから成る。

(5) 前註の橋本先生の発表と、前註(1)の「解題」。

(6) ここで用いる時代区分は、一応政治的な区分とし、次のように設定する。

- 1 奈良時代——延暦一二年(七九三)まで。
- 2 平安初期——延暦一三年から延長八年(九三〇)まで、一二九年間。
- 3 平安中期——承平元年から応徳三年(一〇八六)まで、一三〇年間。
- 4 平安後期——寛治元年から寿永三年(一一八四)まで、一三二年間。
- 5 鎌倉時代——文治元年から元弘二年(一三三三)まで、一四年間。

(7) 『類聚国史』卷一七七の延暦二十一年正月庚午(十三日)の条に、「勅、今聞、三論法相二宗、相争各専一門、彼此長短、若

偏被抑、恐有衰微、自今以後、正月最勝王經、并十月維摩会、宜請六宗、以広學業」とあり、『類聚三代格』卷二にもこの時の太政官符、すなわち「応正月御斎会及維摩会等会均請六宗学僧事」を掲げている。

(8) 『延喜式』卷二十一、玄蕃寮(国史大系本、六六一頁)参照。

(9) 官中最勝講、仙洞最勝講、法勝寺御八講の三。

(10) 修多羅衆については、從来種々の見解が出され、いすれを是とするか定まらぬ状況であったが、近年、その実態が、かなり明瞭にされた。新川登龜男「修多羅衆論」(『統律令國家と貴族社会』昭和五十三年一月、吉川弘文館、一七五頁—一四四頁)参照。

(11) 慧堅の『律宛僧宝伝』十五巻や、義澄の『招提千歳伝記』九巻は、それを詳細に記したものである。

(12) 『七大寺年表』(大日本佛教全書、寺誌部)、慶雲三年の条に「始自十月十日終十六日、前内大臣藤原不比等卿、於宮城東庭設維摩会、講師入唐学生智宝法師」とあり、同四年の条に「淡海公在厩坂寺、請新羅遊学僧觀智、講維摩詰新古両本經」とある。また、建保六年(一二一八)の講師となつた東大寺三論宗の光恵の書いた、維摩会開講の弁の中で、その時までの当会の沿革を詳しく述べている。『維摩会記』(続群書類従第二五輯下所収)参照。

(13) この法会は、和銅年間より始まり、貞觀年間に二月と八月に宮中で廬舎那仏を本尊として、大般若經等の護国・除災招福の經典を読誦させ、論義も行なわれた。

(14) 『東大寺要録』(筒井英俊校訂本)の諸会章第五(一一三頁)参照。

(15) 『元亨釈書』卷二、勤操伝(大日本佛教全書、史伝部)及び『僧綱補任抄出』上(同、史伝部三)参照。

(16) 以下の東大寺の法会については、『東大寺要録』卷四の諸会章、卷五の諸会章之餘参照。

(17) この三十講は、何の三十講か明示されないが、法華經については、法華会と法華八講とあるから、十一月の三十講は、俱含論のそれが、と思われる。

(18) 『東大寺統要録』(続々群書類從第五六所収)に依れば、保延二年(一一三六)始行とされる。また鎌倉時代には「三論三十講」も行なわれた。

(19) このようなトラブルは、興福・東大両寺の勢力争いに依るものが多く、また良家の子弟優先に対する一般大衆の反撥に基づく。

今、一例を掲げると、嘉応二年(一一七〇)には、大衆より良家の子弟は、毎年一人に限り研学堅義とすることを求める訴が出され、安元二年(一一七六)の講師貞敏(東大寺三論宗、年令二十四、臘十)について次のような訴訟があつた。

「今年講師、大衆訴申云、東大寺之者、一年之中三人賜講師請之条、古今無其例、就中淺臘貞敏応請無其謂事也、早可被請專寺也云云、仰云、所申非無其謂、貞然大会已以近々不能改請之由依被仰下、大衆承諾、貞敏遂畢」(維摩講師研学堅義次第、安元二年条)

(20) 平安初期には、護命が律師に任せられていたのみで、中期には三綱の補任者は全く見られない。後期になって法橋が二人、法眼が三人、權少僧都が一人となり、鎌倉に入ると、權少僧都が四十名を数える。

(21) なお、堀池春峰氏の『東南院務次第』の解題(鈴木本)によるところ、京都山科の隨心院所蔵東大寺文書を参照することによつて、より一層当院の沿革が明らかにされるはずである、と述べられる。

(22) 空海の「御遺告」や「故贈僧正勤操大德影讚」の成立及び、凝然が『三国仏法伝通縁起』の「真言宗」の条に「道慈以真言法授善議慶俊、議公授之于勤操僧正、勤操授求聞持法于弘法大師」と述べることと傳承等。

(23) 「五獅子如意之由來」(大日本佛教全書、寺誌一所収の『諸集』の中の一文)等参照。

(24) 筒井英俊『東大寺論叢』岡版篇(昭和四十八年十月)参照。

(25) 『維摩講師研学堅義次第』延喜十一年の条。『東南院務次第』の延懶伝(大日本佛教全書、史伝部四)及び『元亨釈書』卷四、聖宝伝等参照。

(26) 維摩会の記録上は、鎌倉時代に入つてから三回の記載があり、東大寺側が、興福寺の訴訟を不服として、如意を出さなかつたこと、ために大会が延引したこと等が述べられている。また『維摩会方例考』(大日本佛教全書、威儀部一)では、長治二年(一一〇五)にも、東大寺別當勝覚(第七十四代、醍醐寺)と東南院々主覺樹との間に相論あつて、やはり如意が興福寺に渡らず、十二日になつて始めて如意を受け取つたといふ。つまり維摩会において、この如意が非常に重んじられたことを物語る。

(27) 『東南院務次第』及び『東大寺要録』卷四「諸院章」参照。

(28) 大安寺・元興寺・西大寺の伽藍の沿革については、大岡実『南都七大寺の研究』太田博太郎『南都七大寺の歴史と年表』参照。

(29) 尊勝院の設置は、東大寺第四十五代別當光智が天暦元年(九四七)に建立したものとされる。『東大寺要録』卷四、「諸院章」参照。ただ設置については、天徳四年(九六〇)という説もある。『東大寺尊勝院院主次第』の「解題」(鈴木本 大日本佛教全書)参照。